



ReLive Journal



“りらいぶ” ジャーナル No.31

2019年 陽春号 (4月20日発行)

< “りらいぶ” 憲章 >

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、その生き方をサポートします

<目次>

1. タイのバンコク・アユタヤ・チェンマイの旅 (会員 山本 昌弘)
2. 終活を始める(将来の楽しい人生を求めて) (R & I 顧問・会員 渡嶋 八洲夫)
3. ロングステイ活動と終活準備 (会員 宮寄 哲郎)
4. IN PURSUIT OF excellence - PART 2: TO NORTH AMERICA, AFTER 1972 (会員 赤神 潔)
 - SEGMENT 10 : With Ralph Space
 - SEGMENT 11 : Space farms, museums, and zoological garden in N.J.
 - SEGMENT 12 : Rattlesnake hunting on the Appalachian trail
5. 関西支部行事のお知らせ (関西支部長 阿賀 敏雄)
6. 東京地区行事のお知らせ (事務局)
7. タイ オムコイ バーンクンメートウンノイ小学校支援事業訪問記 (会員 三原 健三)
8. 電話に出られません！ (ヤスコ Wild (会員 杉山 泰子))
9. 関西支部、東京地区行事関連チラシ



1. タイのバンコク・ アユタヤ・チェンマイの旅

会員 山本 昌弘

タイ・チェンマイの記事は本NPOの先輩諸氏によってこれまで何度も紹介されているが、今回初めてタイを旅行した体験を紹介したい。初めてのタイ旅行ですが、正確には2回目で、一度、クルーズ船でランカウイ島に訪れたことがあるが、本格的なタイ旅行は初めてである。それで、最もオーソドックスに、首都バンコク、アユタヤそして最も訪問したいチェンマイの3か所に絞って、2月の上旬の日本が寒い時期日本脱出をかね2週間のゆっくりした旅をすることにした。

タイの首都バンコクは1000万人以上住む大都市で、気候的には熱帯に位置し、年間を通じて最高気温は33度前後、最低気温は20度から25度を保っている。訪問したのは2月の上旬である。朝夕は少し涼しいが日中は日本の真夏の暑さで、傘でもさしたいくらい厳しく、街中をあるく時は日陰を選んで歩くくらいである。

バンコクのホテルは街の見物が容易なように王宮、ドゥシット地区に沢山ある中級クラスの宿をとった。バンコクには至る所にバザールがあり、このホテルにも歩いて数分の場所に大きなバザールがあり、昼間から賑わっていた。



王宮

王宮周辺はチャオプラヤー川とローツ運河に囲まれたラタナーコーシン島に在り、バンコクの発祥地で、王宮や寺院が多数あり古い町並みが残った旧市街である。

この地区の中心は何といっても王宮で、敷地の中央にそびえる建物がチャクリー・マハ・プラサート宮殿である。1882年にラーマ5世によって、チャクリー王朝100周年を記念して建てられたものである。王宮に隣接して建てられているプラケオ寺院は1782年にトンブリーからバンコクに遷都した時に建てられた寺院で、その中で、黄金に輝くプラ・シー・ラタナー・チェディはアユタヤ王宮内の仏塔をモデルにして建てられたとのことである。



プラケオ寺院



ポー寺院

ポー寺院は1788年にラーマ1世によって建てられたもので、タイ最初の大学として、また、巨大な寝仏のある寺として有名である。長さ46m、高さ15mの仏像はお堂のほとんどを占めており、横たわっている。

バンコクを今回初めて訪れたが車の多さに驚いた。交通渋滞の洪水で、信号待ちでは15分程度待つのも当たり前であるようであるが、タイの人は慣れており、これが普通とのんびり待っている。



小型オート三輪トゥクトゥク

そのためバイクが普及しており、車をぬって多数走っているのが異常である。お母さんが子供た



ち2人をバイクの前後に乗せて学校へ送り迎える光景が朝夕に散見される。車の渋滞を避けるために、トゥクトゥクという3輪タクシーが普及しており、街中の移動手段として庶民の乗り物として普及しており、値段を交渉して乗ることが求められる。

バンコクから北へおよそ 80km のところにアユタヤの町があり、バンコクからバスで2時間弱で到着する。アユタヤは1350年から約400年続いたアユタヤ王国の古い町で世界遺産に指定されている。

アユタヤには多くの寺院が建造されているが、隣国のビルマ（ミャンマー）との再三の戦いで建造物の多くは破壊され、顔のない仏像や崩れ落ちた仏塔（チュディ）が多数残されたままである。町はバンコクの騒々しい街と比べ静かでゆったりしたいい街である。

町の南東にチャオプラヤー・タイ寺院がある。セイロンに留学し帰国した僧侶たちのために初代ウー・トーン王によって1357年に建てられたと伝えられており、町から離れていたことで珍しく全体が破壊されずに残されている。



チャオプラヤー・
タイ寺院



ロカヤスタ寺院

ワット・ロカヤスタはタイの世界遺産「古都アユタヤ」遺跡の1つで、屋外に悠々と横たわる全長28mもの巨大涅槃仏で、人気の観光地になっている。ワット・ロカヤスタは、タイ・アユタヤ王朝時代に建立された仏教寺院でビルマ軍侵攻

によって破壊され、今は1956年に復元された涅槃仏が残されている。

アユタヤ歴史公園にある仏教寺院であるラー・チャブーラナ寺院は1424年に8代王ボロムラーチャー2世が建立したものである。初めはクメール様式に似た2つのchediだけが建てられたが、その後大きなプラン（クメール式仏塔）と礼拝堂が追加され、大きなプランは途中まで登ることができる。



ラー・チャブーラナ
寺院



アユタヤで忘ることのできないのは日本人村跡である。14世紀中ごろから18世紀頃までアユタヤにあった日本人町で、アユタヤの中心地からチャオプラヤー川沿いを南に下がった東岸にある。

南北570m、東西230mの敷地に最盛期で1500人程度住んでいたようである。アユタヤ日本人町は14世紀ごろに始まり、日本の戦国時代に主君を失った浪人が流れるようになり、日本の関ヶ原の戦いの後多くの浪人が流れたようである。当時ビルマから軍事的压力に悩まされていたアユタヤ王朝は実戦経験豊富な日本人兵を傭兵として雇い入れたのが始まりとされている。

山田長政は1612年に朱印船で長崎から台湾を経てタイに渡り日本人町に住みついた。スペイン艦隊の2度にわたるアユタヤ侵攻を退けた功績でソンタム国王の信認を得てプラヤーという官位を与えられ、跡地には山田長政像が建てられ



ている。

バンコクから北へ飛行機で約1時間の地にタイ第2の都市古都チェンマイがある。北タイ一帯を治めたラーンナー・タイ王国の首都として1296年に建設された。町には100を超える寺院が立ち並び、北方のバラと称される静かで美しい町である。チェンマイは堀と城壁に囲まれた1.5Km四方のほぼ正四角形の旧市街とその周辺を取り巻く新市街からできている。バンコクと比較して気温や湿度が低く、こじんまりとした街で、日本からの長期滞在する人が多いのがわかる気がした。

旧市街には多くの寺院がたち並んでいる。チェン・マン寺院は旧市街の北側に位置し、旧市街の北の入り口であるチャン・プック門の近くにある。チェンマイに都をおいたラナー王朝の初代王であるメーンライ王が13世紀後半に建てた寺院で、かつては宮殿でもあった。伝統的なタイ様式で、中の拝殿は壁画や装飾が美しく莊厳で大変味わい深いお寺である。



チェン・マン寺院



チェディ・ルアン寺院

チェディ・ルアン寺院は旧市街のほぼ中央に位置し、チェンマイではプラ・シン寺院と並んで格式の高い寺院である。お堂の入り口はヘビやクジヤクの装飾が施され内部に大きな仏像があり、チェンマイの寺院の中でも最も人気がある寺である。プラ・シン寺院は1345年にラーンナー王パユーが父カム・フー王の墓としてチェンマイの旧市街の西側のスアン・ドーク門に近い場所に建立されている。

ライカム礼拝堂は白亜の壁に金色に塗られた木彫りの正面扉は繊細な装飾が見事に飾られ、チェンマイで最も格式が高い寺院として有名である。

チェンマイの近郊西の市街から20Km弱の所に標高1080mのステープ山があり、その頂上に立つプラ・タート・ドイ・ステープ寺院は1383年にランナー・タイ王国時代、6代目の王であるクーナ王によって建立された古いお寺である。麓から306段の石段を登ってゆくと頂上に着き、そこに見事な寺院が立っており、チェンマイの中で最も重要な寺院として多くの参列者で賑わっていた。

チェンマイの移動手段として乗合トラックであるソンテウが街中を沢山走っている。ソンテウは客を拾いながら決まったルートを走っており、手を挙げて行き先を告げ、値段を交渉して乗ってゆくもので、タクシーよりも割安で機能的である。



乗合トラック：
ソンテウ



タイで有名な民族舞踊の見物に行った。若い男性と女性が参加してきれいな民族衣装を纏って各種の民族ダンスを歌と楽器と音楽と踊りがキーワードで踊ってくれる。タイ舞踊は指や指先の繊細な動きが特徴で、身体全体で美しい曲線を描いてあらゆるものを見表現するようである。かつては王宮内でのみ舞うことが許された特別に高貴な踊りだったようである。

初めてのタイ旅行であったが、2週間がアッと過ぎ短く感じた。物価が安くタイ料理はおいしく、もう一度行きたい国である。

(記 2019.3)



2. 終活を始める (将来の楽しい人生を求めて)

元キャメロン会 会長
R&I 顧問・会員 渡嶋八洲夫



幸い平均寿命82歳を超え86歳になろうという現在ですが、そろそろ終活を考える年齢になりました。

68歳の定年退職後の生活は、健康に恵まれた、楽しい毎日を送ることが出来たことでした。

これは家族、友人、知人の支援の賜物と感謝しております。

今の状況は200m競争に例えれば第1、第2、第3コーナーを回り直線距離をゴールに向かってひた走っているところです。終活を考える年齢になりました。

りらいぶジャーナル28号(2018年8月20日発行)に終活一部「健康管理の見直」を投稿しましたがこれも終活の一部でした。

これより間口を広げた「これから的人生のより良い生き方」「自分なりの人生の整理」「家族の負担を少なくする」を目的とした終活を始め、エンディングファイルに保管することにしました。

死について話し合うことは「縁起が悪い」ということは最近では少ないように思います。棺桶に入つて感慨にふける人もいる時代です、生前葬をやる人もおります。終活として自分がやろうと考えていることを順不同ですが述べてみます。

1. 整理

先ず思い浮かぶのは身辺の整理です。自分には大切だったものも、家族にとってはゴミにすぎないものを多く抱えております。この際思い切って整理をする勇気が必要です。

① 書籍

10年前に家を新築した時に思い切って整理しました。真先に整理したのは全集です、買い手もなくゴミとしてだしました。本・雑誌を新しく買うことは極力おさえ、図書館の活用を心がけております。

② 写真

*分厚いアルバムに保存しておりましたが、そのアルバムを分解、それでも捨てがたい写真だけを項目別に簡単ファイルにおさめ可成の量を減らしました。

例(会社)(テニス)(ゴルフ)(キャメロン)
(本人)(家族)等

*最近では焼き増しせずパソコンで項目毎に保管しております。

例(2016年スイスハイキング)(2012年アドリア海クルーズ)(2017年チェンマイ滞在)



*祖父→父母→自分→子→孫と我が家家の写真集を作りました。これだけは我が家家の記録として永久保存版にしたいものです。

③ 趣味の切手(少年時代から収集してきた)

「日本の最初の記念切手からその後の記念切手」、「テニスの切手」、「地図の切手」、を残し戦後の切手は郵便物発送時に使用しております。戦前からの普通切手は切手で絵を描く友人に進呈しました。



④ トロフィー、カップ

テニス大会やゴルフ会で獲得したもの数点を残し廃棄しました。

⑤ スポーツ用品

ゴルフクラブは破棄します、1部のゴルフクラブはキャメロン会に寄付しました。テニスラケットと水泳パンツは棺に入れてもらうよう家族に頼みます。

⑥ 紅茶（コーヒー）カップ

海外出張の時等各地のカップを購入してきました、良い物も多いので今後未永く使ってもらいたいと思っております。

（以上の詳細記録はエンディングファイルに保管）

2. 頭脳を活性化するトランプゲーム

① 囲碁

止めることとし囲碁盤と石並びに関連書籍は友人に贈呈しました。

② コントラクトブリッジとブラック

A. コントラクトブリッジ

コントラクトブリッジ、ポーカー、ジン・ラミーは3大トランプゲームと呼ばれております。この中でコントラクトブリッジは130ヶ国で約1億人愛好者がいると言われております。4人でプレーし、各対面した2人がペアとなり、ルールに従って宣言（ビッド）、プレーをし進めます。プレー中は一切言葉を発する事は禁止されており、自分の意思はパートナーと決めた（システム）に従って伝える必要がある。このシステムを暗記しなければならず初級・中級・上級の解説書が発行されております。

*可成の量のシステムを暗記する事が必要。

*戦術を立てる。

*予測する。

*2人ペアでのプレーなのでお互いのコミュニケーションとパートナーシップが必要。

*駆け引きが必要。

月に5回程度公共のブリッジセンターでプレーします。クルージングの時は船主催のブリッジ会が開催され、参加します。タイ国チェンマイに滞在中は現地ブリッジクラブ主催のブリッジ会が開催されておりますので出来るだけ参加し

ます。

B. ブラック

ブラジルで考えられたトランプゲームで、ブリッジ程記憶する項目は多くなく、短期間で理解し、プレーが楽しめます。マレーシアのキャメロンハイランドに滞在中やクルージングで友人とプレーを楽しんでおります。その他月1回定期的に友人とプレーします。ブリッジと同様2人ペアでプレーします。

*プレーは短時間でマスターできる。

*推理は必要。

*ツキの割合が比較的大きい。

*お互いのコミュニケーションとパートナーシップは必要。

3. 旅行（ロングステイとクルージング）

ロングステイ、夏季は猛暑を避けて2ヶ月の平均気温20℃と快適なマレーシアの高原キャメロンハイランドで過ごします。冬季は近場で暖かい台湾高雄とタイ国チェンマイで過ごします。

クルージングは日本発着の手軽なクルーズに特化するつもりです。

4. 流動資産

① 銀行関係

（銀行支店の口座番号）を記載した一覧表を作成しました。

② 証券会社関係

*株式（会社名、株数、取扱店）を記載した一覧表を作成しました。

*投資信託（名称、口数、取り扱い店）を記載した一覧表を作成しました。

*印鑑の保存場所、適用金融機関をエンディングノートに記載しました。

*家屋・土地の権利証の保管場所

*権利証の保管場所は「りそな銀行田無支店」に借用している金庫に保管しております。

（以上の詳細記録はエンディングファイルに保管）

5. 年賀状

年1回知人、友人に自分の近況を伝える良い機会と考えており、今後も続けたいと考えております。単なる儀礼的なものは廃止、メールが可成普



及しており、親しい友人にはメール年賀状への切り替えを考えております。

6. 健康管理

NPO 法人リタイアメント情報センター りらいぶ ジャーナル28号(2018年8月20日発行)に記載されているので項目のみに留めます。

- ① 食事 (1日 1500 カロリーにおさえ、野菜とタンパク質を多く、炭水化物と脂肪は避け、数種のサプリメントは愛用している)
- ② 運動 (ジムで固まった筋肉と関節を解すとともに筋肉トレーニングにも励む。負荷が軽減される水中ウォーキングは膝痛改善には有効と考えている。テニス、トレッキングは膝痛が改善するまで一時休止)
- ③ 身体の定期チェック (毎月主治医の診断と年1回の人間ドック)

7. 自分史

幼少期、小学校時代、中高時代、大学時代、会社時代、第2の人生等について記述します。紙面の都合で詳細は割愛します。

8. 尊厳死宣言

植物人間になってまでも生きることを望まないので、「尊厳死宣言」を作成、家内、子供に託しました。

【私は死に際して自然に逆らわらず安らかな死に方を自分自身で選び、人間らしく死ぬことを主張いたします。

私の病が治る見込みがなく、死期が迫っている場合にはただ延命の目的だけの処置は一切行わないでください。又苦痛を和らげるための治療は最大限実施してください。このことで死期が早まってもかまいません。私が植物状態に移行した場合、生命維持装置を外してください。

この宣言に従って実施された行為の責任は全て私自身にあります。この宣言書は私の精神が健全な状態にあるときに自書し、署名捺印したものであることを証します。

年 月 日
サイン (印) }

9. 遺言

元気なうちに遺言をしたためます。

- ① 流動資産の分配
- ② 土地、建物の分配
- ③ 葬儀
近親者のみの家族葬
- ④ 逝去通知
A 寺 (a 善居院 b 葬儀屋)
B 公的機関 (a 市役所 b 年金機構)
C 会社関係 (a IHIC b ICC c 溫厚会
d 翠風会 e ICC OB会)
D 友人・知人 (葬儀が終わって1ヶ月後)
名簿はCPUで保管。

以上

3. ロングステイ活動と終活準備

元NPO法人 南国暮らしの会 理事長
会員 宮崎 哲郎



チェンマイでの筆者＆奥様

1. アフターロングステイと云う活動の必要性

ロングステイ(年間半年以上特定国長期滞在型)を実行してきた方々が「第二の人生」を海外で謳歌していても70歳を過ぎる頃、自然と日本へ引き上げることを考えるようになり、その後各人の状況に依って帰国するステイヤーが増えてきました。



これには 2012 年円安傾向に加えアジア諸国の物価上昇等経済的な要因も作用しますが、主な要因としては、特定国海外暮らしがショート、ロングに関わらず長くなりますと(10年~15年)身体の健康のみならずこうした生活をする事に年齢に依る心の疲れ、即ち「飽き」が来たり、「もう充分」という精神的要素に依る事が多いのではと推測しております。

年齢的にいふと、67~70 歳はまだ元気にロングステイを楽しんでおられます、概ね後期高齢前後 75~77、78 歳くらいからこの様な状況が出てくる様です。

夫婦ふたりとも元気いっぱいというのは 60 代までのこと。70~75 歳を超えると個体差は有りますが、身体ばかりでなく精神的にも昔と比べ明らかに加齢を意識、感じることが多くなって参ります。夫婦の片方が体調を崩したら、ロングステイは終わり、大半の方々は帰国することになります。歳を重ねる毎に自分自身や身の回りの家族、親戚、友人にいろんな不都合なことが起り始め永年住み慣れた滞在地から引き揚げ、国内回帰するロングステイヤーが始めます。

そこで海外でのロングステイ(第二の人生)を卒業し、日本に帰ってきた後を「第三の人生」と称し、その過ごし方を如何にするかを模索するステイヤーが増えそれを私は「アフターロングステイ」と名づけました。

迫りくる老いと向き合いロングステイ活動の継続とより一層充実した楽しい老後を迎える為の備え、所謂「終活」問題がクローズアップして来たという訳です。

たとえ長い間ロングステイをしていても、殆どの方は現地に留まり続けず日本に帰ってきて夫婦で老後を過ごすと云うのが一般的です。ロングステイをした後に何をするかには、それぞれの事情や環境、日本の居住地によって当然個人差がありますが、誰でもこの年齢で直面するのが、年齢相応の備え、例えば「病気、介護(認知症)、相続問題(遺言書作成)、成年後見制度の検討、終の棲家(選択等)」「断捨離」などの「老いじたく」所謂「終活」の準備です。

この終活準備項目は上述のアイテム以外に

諸々 20 項目以上有りますがこれらを実行するには体力、知力の衰えの無い最適な時期としては概ね 60 歳後半から 70 歳半ば頃ではないかと考えております。

これらの「備えは」誰しも必要な事と分かりながら「そのうち何とか」とか「何とかなるだろう」と準備を伸ばし伸ばしにして先送り、実行されている方は少ないのが現状です。誰しも意外とこの準備の時間及びこれを実行する自分のパワーは残り少くなっている事の認識力希薄で、早めの気づきが必要ではないでしょうか。

そのために如何にするかが問題です。この課題について自分ひとりで考え計画することや、それに関する情報収集の面倒くささ、そしてどうすれば良いのかその方法等が、非常に煩雑な為、老化に伴う現象として日常生活に埋没し、ついつい「明日、明日」と後回しし、アッという間に歳を重ねる云う事になります。

そこで第 2 項で取り上げましたが勉強会の様な志向の同じ仲間が協力し合い知恵と力を出し合って多くの情報を集め、対策を勉強することが最もイージーで実行し易いやり方だと思います。

これに依り得られた情報をベースにすれば各人自分の状況、家族環境にアプライし実際行動に結びつける切っ掛けが出来ると考えられます。

こうした情報交換やお話しをしながら「ロングステイ」を併行に見すえ、「仲間作り」、「助け合いの場作り」「懇親の場」などの組織作りをして実行する事がベストな選択だと考えます。

海外でのロングステイが終わり帰国した時、組織を離れ永年築いたサークルやステイ地で培われた友人達との縁を切り、新しい友人や地域社会とのネットワークの再構築は容易な事ではないでしょう。

残された人生で自分の身に何か起こった時の準備は、ロングステイを終えた人ばかりでなく、日本を離れ長期間ロングステイを現在実行中の方や、これから始める方々にとっても本来は必要な事であり、この準備、用意をして置くことによって後顧の憂いなく安心して、海外での生活を楽しむ事が出来る事と思います。



2. アフターロングステイ同好会（仲間）とその成果

そこで自分ひとりで取り組んだり、「終活項目」を考え、前述した様に自分一人で調査や検討することはかなりハードですので、サークル内で仲間が集まり、テーマ作りから調査し纏めることがベターと思い我々は研修会（同好会）方式を取り勉強を始めました。我々が取り組んだ活動を具体的に紹介し参考に供したいと思います。

研修会メンバーは約 20 名程、期間は平成 19 年より約 2 年間で 2 カ月に一回程度の開催をし銳意努力をして参りました。

その取り纏め項目（（テーマ）と成果について以下の通りです。

- ①介護及び介護付き老人ホーム、終の棲家、サービス付き高齢者住宅委員会メンバー 7 名が施設見学約 15か所実施、メンバー 1 名「介護付き老人ホーム」へ待機申し込み実施。
- ②成年後見制度（任意、法定）。メンバー 1 名が任意後見制度契約実行。
- ③遺言書作成。公正証書としてメンバー 2 件実施、尊厳死宣言書メンバー 1 件実施
- ④エンディングノート作成。メンバー全員購入し所持。記入作成済み。
- ⑤葬儀（小さなお葬式等新しい形の葬儀情報）及びお墓問題情報交換
- ⑥健康、医療、認知症、健康維持の自己管理方法についてはメンバーの一人である医師による説明、情報提供を受けることが出来ました。これは日常生活にも非常に役立つ情報でありました。
- ⑦断捨離（各人検討中）身支度は全てここが出発点となります。中々難しい事です。
- ⑧在宅介護可能性検討、各自治体地域包括ケアシステム調査。このため各メンバーの居住地域の「在宅介護支援センター」の訪問調査後、実情報告を各メンバー発表実施。地域によって相当中に差があります。
- ⑨少子高齢化、2025 年問題特に東京圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の高齢化介護

の今後起こりうる問題点取り纏めましたが各县で介護施設の奪い合いが起こる可能性が大であると認識。

- ⑩「お試し移住体験施設」利用に依る体験、地方への移住（国内移住）の検討メンバー 3~4 名実施
- ⑪高額医療費制度の利用と認識により医療費の軽減策。
- ⑫老後資金必要総額の検討。
- ⑬介護に関するセルフ（自己）セーフティネットの構築（居住地区自治体の状況把握、地域住民との連携方法検討が大切になる）。これも地域差の大きいことが問題。
- ⑭夫の死亡に伴い配偶者へ（1）一時金をすぐ受け取れる（2）妻はその後、年金形式で一定額を受け取れ遺族年金の減額補填が可能な信託銀行取扱いの「相続型信託」という便利な預金があります。メンバー 1 名がリスク回避としてこれに加入しました。

以上、取扱う項目が重いが、皆にとって何か気になるテーマを考えたり、実行の必要性は分かっているが、歳を取ると自分一人で取り組むことは大変難儀なものです。

こうしたことを考慮すると短期間でお互いが刺激し合い終活に危機感を感じて集まった半分以上のメンバーが少なくとも何等かのテーマを実行に移しており、これは大変大きな成果でした。

なおメンバーの年齢・家族状況・地域性・家庭の財政状況・性格等々によりこうしたテーマに対する驚くほどの「意識差」が各人にある事が今回検討を実行しながら、反応を観察し認識できました。これは恐らく各人の「心の中にある将来の不安」と「日常の生活」での感覚、意識の落差の為であろうと推測しております。

この研修会はその後も終了することなく現在も終活を含めレクリエーション的活動、脳トレ、メンバーの懇親などを目的に同好会を継続しております。

又各人短期（1~3カ月位）のロングステイも各メンバーは継続中です。

以上



4. IN PURSUIT OF excellence

PART 2: TO NORTH AMERICA, AFTER 1972

SEGMENT 10 & SEGMENT 11 & SEGMENT 12

会員 赤神 潔

SEGMENT10 : With Ralph Space

Every morning, I went from my hotel to Moe Lipson Co., where Mr. Masuda was working, in the fur town in Manhattan and hung around in and out all day, knowing that some mink ranchers would eventually come there. I asked Mr. Masuda to let me know when they came.

Soon I found out that I could take Chinese or Greek food there with no problem. There were always dishes with steamed or fried rice in both Chinese and Greek foods. Although the flavour and texture of the long grain rice in the cartons was different from ours in Japan, I felt in my gut that I could easily live in New York as long as these foods were always available close by. I felt very lucky at that moment, because I'd been trained to eat bowls of cheap rice with fifty percent flattened barley in the National Defence Academy in Japan.

Finally, about two weeks after I arrived in New York, an old, gentle mink rancher of stout build appeared where Mr. Masuda was working and I had been hanging around. The president of Moe Lipson Co. approached me and whispered in my ear that his name was Mr. Ralph Space and he was one of the top-class mink ranchers in the United States; I should talk to him right away. I quickly

introduced myself, using the words I had prepared.



RALPH SPACE

"I went to the National Defence Academy in Japan, but I fell in love with the mink business. I would like to study more about it here, at the home of the world's mink business. I'll work hard and I won't give up easily, so please hire me as one of your helpers."

Without a word, he abruptly grabbed my right arm and squeezed and let go of it, from my shoulder to my elbow, half a dozen times with his large, thick, warm hands. It was as if he was feeling and examining the amount of muscle in my arm, like an ancient slave driver. After a few seconds, he began to smile jokingly, opened his eyes wide, and said to me, nodding his head up and down, "Okay, come to my farms next Sunday."

It took me more than an hour by bus to get to Newton from Pennsylvania Station in Manhattan, through the Lincoln Tunnel toward the most northwest corner of New Jersey. I called Space Farms from a public telephone booth by the bus stop. In no more than ten minutes, Fred, also ruddy-faced and stout, picked me up in his comfortable, cream-and-dark-brown Ford station wagon with licence place NJ001. He was dressed safari-style from head to



toe, in brand new, starched and ironed, short-sleeved khaki shirt, khaki shorts, and wide-brimmed khaki hat, looking as if he had just come off a Hollywood movie set in one of those movies of “wild animals in Africa for rich American hunters or zoo owners” starring Gregory Peck or Clark Gable or Cary Grant. There were round, green-and-dark-brown Space Farms emblems, with a picture of a buffalo in a green field, on both of his upper arms and his left chest. He also wore dark-brown leather boots. There, under the emblem on his chest, was his name: Space Farms Owner, Fred Space.

The moment he got out of his station wagon and found me standing by the public telephone booth, he grinned at me and opened his arms wide. He hugged me, his eyes wide and popped out. I had never in my life in Japan been hugged so wildly.

He talked quickly in a high tone of voice, half of which I could not exactly understand.

SEGMENT 11: Space farms, museums, and zoological garden in N.J.



SPACE FARMS MAIN BUILDING

Space Farms, Museums, and Zoological Park, which Ralph Space had built up with his mink and fox business, were extremely prosperous. They produced 40,000 of the finest,

world-renowned mink pelts in North America annually. In addition to that, there was a state-of-the-art, fully automated dairy farm with 180 milking cows; 450 acres of corn; and a large fur shop, with a larger collection of full-length mink coats and jackets than I had seen in most department stores, Macy's, or Gimbel's in Manhattan. There was also a large gift shop, a restaurant, and a zoological garden with more than 500 wild animals, the biggest private collection in North America at the time. There were fine collections of classic cars and antique tractors, motorcycles, and station wagons sleighs; fine collections of Indian artifacts, dolls of the world, antique clocks and watches, antique music boxes (orgels), and antique guns. None of these were merely odds and pieces.

The main road, Beemerville Road, ran east and west through the middle of Space Farms. The main building, museums, and zoological garden were on the south side of the main road. The landscaped central square lay on the north side, across the main road from the main building. Fred's house and the dairy barn were on the west side of the central square. The feed house and freezer, which was an old school house, large parking lots, fire station, and church were on the east side. The wide, white mink-yard gate was on the north side, facing straight toward the main building. The wide central service road in the mink yard started north from the gate, also angled right to the main road. Many rows of mink sheds lay along both sides of the central service road. The mink yard was about 40 acres, surrounded by



450 acres of cornfields.

The summer saw about 50 school buses, 40 tour buses, and hundreds of cars and pickup trucks every day. It seemed to me that most of the activity on and by the main road in Beemerville Village was at Space Farms. Ralph was the head of the family and 75 years old. Fred was around 50, and Eric, a student at Wyoming State University, was 20. There were two girls, Lori and Renee, going to high school. Parker was the youngest, five years old, the same age as my son, Ryojo.



ERIC, RENEE, RALPH, LORI, FRED AND
IN FRONT IS PARKER, TAKEN IN 1977

SEGMENT 12:

Rattlesnake hunting on the Appalachian trail

As soon as we arrived at Space Farms, Fred told me to wait for him. He walked into a crowd of visitors at the main doorway of the main building, leading to the restaurant, zoo, gift shop, fur shop, and several museums, and into his office. He came out the same way with a handful of necessary things, and said to me, "Let's go hunting snakes together, rattlesnakes, you

and me! You come with me, Jimmy!"



FRED SPACE

He gave me a dusty old gunnysack, and we jumped into his Jeep: ropes; a roll of haywire; cables and shackles; pieces of two-by-four; several large, soiled rocks; garbage he had picked up on the property; heavy, rusty chains; hammers and sledge hammers; tools I'd never seen; picks and shovels; mink traps and leg-hold traps, large and small; large, half-eaten animal bones with rotten, dark-red meat covered in flies; hayforks; a rake and a broom; and half a bale of hay.

There was a long, rocky, open fault line, the Appalachian Trail, running northwest to southeast from the west side of Beemerville Village, where, he said, rattlesnakes liked to sunbathe or nap on the huge rocks. (Their diameter was about twice or more the size of a man!)

When we arrived, before I knew it he began jumping from rock to rock, looking for rattlesnakes. In less than a minute, he had caught one by the tail, using one hand and a metre-long, stainless steel stick. He forced it into the gunnysack, the opening of which was only about a foot and a half in diameter. The mouths of rattlesnakes were going through that



opening, which I was holding onto with my bare, jumpy hands. I was to close the sack as quickly as I could when he put one in. If a snake rose up toward the mouth of the gunnysack, I was to shake it down to the bottom so as not to get bitten.

I had heard of poisonous snakes before but had never seen a rattlesnake. I tried to hold out until the end, perspiring greasy sweat all over my body. I was panicking but forcing myself to stay quiet. I was completely exhausted, unable to speak English well enough to defend myself.

After he caught five or six fat and heavy, long and mean rattlesnakes, he started slowing down and calming down. Finally, he signalled me with his thick thumb and forefinger. Mercilessly, he talked fast in his high-pitched voice between rough breaths. I had to guess that he was telling me I had passed my first practical test with a satisfactory mark, because he was smiling without reserve. He must have been testing my character and ability violently, with his strongest professional test, rattlesnake catching.

On the way back to the farm, we dropped into a drive-in hamburger restaurant, which I had never seen before in my life in Japan, and said to me, "Let's have Cokes." He gave me a large cup, maybe a quart, of Coke, too much for me to consume right away. I'd never seen Coke that size in Japan. My stomach was more than full and Coke was overflowing from my throat. Fred finished mine, looking very satisfied with everything, smiling, and said, "This cup is too large

for a Japanese, isn't it?" Back at his office, Ralph and Elinor were waiting for us. Fred guaranteed our green card applications right away.

There were lots of houses and buildings along the miles of main road, running through Space Farms, in front of the parking lots, church, and fire hall.

Toward the end of the day, they decided that the white house with blown gables, next to the main building with Ralph's living quarters and diagonally across the road from Fred's house, was going to be mine.

(END)

りらいぶジャーナル5回に亘り赤神 潔 会員様の自叙伝 **IN PURSUIT OF excellence** (卓越性の追求) から、その英文の一部を掲載して参りましたが、今回を以って終了とさせていただきます。

また赤神会員様には大変失礼なのですが、この自叙伝の英文の一部を取り上げるにあたり、その内容では無く、我々りらいぶ世代にもっと英語に接していただき、英語理解力等を身につけて貰いたいことを目的に掲載させていただきました。

来年2020年東京オリンピックを迎えるにあたり、我々りらいぶ世代を含め日本人の英語力強化は喫緊の課題です。

今回の掲載が少しは皆様のお役に立ったことを期待しております。

そうは言ひながら、赤神会員様がこの自叙伝を英文で本として出版された経緯もあり、日本人として外国の方々へ何を伝えたかったのか等を書いていただくことになっております。

(事務局)



5. 関西支部行事のお知らせ

(関西支部長 阿賀 敏雄)

関西支部では、以下の行事を予定しております。
皆様のご参加をお待ち申し上げております。

◆株式投資教室

講師：柏原 純松（新生投資クラブ代表）

毎月第3 土曜日 11:00～13:00

会場：ホテル・アイボリー

参加費：2700 円（ランチ付き）

◆ベルウッド歌声喫茶

5月 16日(木)、8月 15日(木)、

11月 21日(木)

15:30～17:00 会場…ベルウッド

司会：岸本隆司 演奏：ピアノ 荒木あゆみ、
アコーディオン 比企野芳郎、ギター 植田元則、
クラリネット 大澤泰 参加費：1000 円

◆ベルウッド CD の会

リーダー長岡壽男氏のご都合に合わせて開催
会場…ベルウッド 参加費：1000 円

◆MK 午餐会

講師の麻殖生健治氏のご都合に合わせて開催

◆第6回リタメンゴルフ会

5月 14日(火) 池田カンツリー倶楽部

キャディ付き 五月平コース

幹事長：伊丹淳一

◆佐藤幸子 ドールハウス展 2019

5月 15日(水)～19日(日)

10:00～17:00 (最終日 16:00まで)

豊中市立文化芸術センター展示室 入場無料

◆第5回講演会 「胆斗の人 太田垣土郎」

講師：北康利氏

5月 23日(木)

豊中市立文化芸術センター小ホール

参加費：1000 円

◆リタイアメント作品展

6月 11日(火)～16日(日)

豊中市立市民ギャラリー 入場無料

伊丹淳一、伊丹好子、大澤泰、木津谷文吾、
栗本征彦、齋藤悦子、阪本節子、鳥井幸子、
中野寛成、羽田睦美、夕田芳雄、芳野翠
の皆様の出展。

◆第6回講演会

「如何にして人生 100年時代を迎えるか」

講師：北康利氏川島康生先生

(国立循環器病研究センター 名誉総長)

11月 21日(木)

豊中市立文化芸術センター大ホール

参加費：検討中

<キョウヨウ・キョウイク・エイヨウ・
ショウショウで健康ライフ>

関西支部長 阿賀 敏雄

090-1896-4575

6. 東京地区行事のお知らせ (事務局)

◆東京地区 りらいぶゴルフ 2019春

5月 22日(水) 大宮国際カントリークラブ

◆東京地区 第6回りらいぶ落語会

5月 28日 (火)

開場：12:30 開演：13:30～15:30

会場：お江戸日本橋亭

出演：桂 三若、三遊亭 好太郎、三遊亭 西村

チケット：2000 円

お問い合わせ： 事務局・島村

080-9982-6237

メール：haruo_shimamura@hotmail.com

メール：menocasablanca@gmail.com



7. タイ オムコイ バーンクンメートウンノイ小学校 支援事業訪問記

NPO法人 JT/ASH 理事長
会員 三原 健三

2018年12月11-12日 オムコイバーンクンメートウンノイ小学校訪問

山岳民族の子ども達への教育の必要性を長年にわたり両親を説得する為に近隣の村々を歩き、学校としての機能を確立するために市政府や慈善企業体に働きかけてはいるが貧しさ故予算が取れず苦労している。

校長は自らの体験を通じて、山岳民族の教育の厳しさを支援者の皆さんに伝えるために昨年3月に日本に招待をして講演会を東京で開催した。その時来ていただいたお客様から頂いた寄付金で交通費を賄ったわけですが、余ったお金を学校へ渡す為に昨年12月にあのオムコイ村中心地から更に奥地道なき道をチェンマイから8時間、これで4度目になりますがバーンクンメートウンノイ小学校へ訪問しました。

乾期には入っているのですが、このところの数日前からの雨模様に道路が寸断されているのではと・現地までの行程が心配ではありましたが滞在スケジュールは変更できないので強行出発することにしました

当日は朝7時にホテルに同行者と持っていく荷物を2台の車に満載していざ出発となりました。

子供達が大好きなお菓子を買い込み、そして雨期に土砂崩れで食料が不足した報告を受けていたので乾燥麺などを事前に市毛氏に依頼して買い込みをしていただきました。

この学校への寄付活動を始めて今年で5年目を迎えますが、5年間という歳月は歳をとった体にはかなり厳しいものがあります、以前同行していただいた年配者の方々の中にも老化が進み日本に戻られた方々も居られます。小生も70歳になり自分でも感じるほど個々の動作が遅くな

って来てはいるが、それでも元気に手を合わせてワイをして向かえてくれる子供達と出会うとそんな苦労も飛んでしまうから不思議な力があります。



私もNPOJTASH が寄贈した図書館の下には2018年2月に職業訓練センターを日本の蓮田ロータリークラブと宮崎南ロータリークラブが寄贈され、2019年1月には太陽熱温水器が寄贈されます。

その温水器を接続する業者は前日にバンコクから来られ、チェンマイのチェンマイ北ロータリークラブの方がたも山の下にある中学高校の校長と教師と話があるというので同行することになりました。

12月11日朝08時にホテル出発し、この場所に来るのかはじめての方や既に1回山まで行かれた方がたとオムコイの貧しさやオムコイの子供達のこれから教育支援の大切さを話し合いながら・道中懐かしい景色と変わり行く時代の流れを感じながら、休憩をしながら山の下の村に到着したのは12時30分ここまで来ると残りはもう少し、やっとここまで来たという安堵感とまだこれから一番の難所があるかと思うと少々足がすくみます。

ここまで來るのに少々車酔いに、同行者から薬をいただき飲んで準備万端。ご存じかと思います



が日本の市販薬は薬事法があるため規制がありましたがタイの市販のクスリは厳しい規制がないのでよく。タイ人はちょっとした病気は病院にかかると費用がかかるため市販のクスリですますがこれが良くなります。

話しあは戻りますが、ここでバンコクから運んできた車では登れないで、太陽熱温水器を4輪駆動の車に移し替え、一同はクンメートウンヴィック中高校の学校へ立ち寄ることになりました。宮崎南ロータリークラブさんは何とか看護士を育てオムコイで医療の仕事について欲しいという願いから教育支援として1人の高校3年生に4年間の看護を勉強する為の費用を出してあげることで…看護士になりたい子供達がいるのか…どういうシステムで看護士になれるのか…と色々な話を聞きました。



しかし、せっかく看護士の資格が取れても公務員試験に受からない限りはこのオムコイの病院に戻れないという現実がありました。

このオムコイには病院はオムコイの町とこのメートウン分室しかありませんこれらは全て国立病院のため公務員の看護士でないと入れないからなのです。

この貧しいオムコイには…皇室からの支援もあるということわかりました。

それは亡きラマ9世のお母様が設立した財団からの奨学金制度により看護士或いは保健士として働くことが出来る奨学金があるということ、しかし年間数人の枠の為中々希望者全てが看護の道を通れないということもあるということが

わかりました。

日本とは考え方も違い中々難しい現実にただただ、話を聞きため息が出る様子が氣の毒でなりませんでした。

今回は寄付金を渡しに学校を訪れたわけですが・この寄付金を全部渡してしまえば、今回でこの教育支援が終わってしまいます、それでは後どうして継続できるだろうか?

またはロータリークラブの方々と組んで看護士養成支援にまわした方が良いだろうかと思案しておりましたが、よく考えてみれば、この寄付金は前回の講演会でオムコイバーンクンメトウンノイ小学校の子供達の教育支援にと皆さんのご厚意で集まったお金です、なのでやはりこの小学校で支援が出来なければ意味がありません。

具体案を打ち出し明日の朝礼で報告する為に校長と話をしてみると、たくさんのお金を上げることは教育上良くないので、子供達がやる気を起こして楽しんで勉強してくれるよう応援する手立てとして

学業優秀者2名、

互助精神優秀者2名、

親孝行優秀者2名

を前期6名後期6名を選出し一人500Bを賞金として渡す支援ではどうかと、このお金が長期間子供達への頑張る力への支援として…継続されることが…一番の方法ではないだろうかという話でまとまり…やっと揺らいでいた心が安心感に満たされた気がしました。



翌朝朝礼で子供達との交流と寄付のお菓子を配る際に僕を覚えていましたか?の問いかけに5年生と6年生が覚えていましたと大きな声で返事をしてくれました…



そうなんです最初にこの学校に来た頃の子供達は5年生6年生に成長したのですね・・とても嬉しく思いました。

“ありがとう” “美味しい”を連発する子供達の声が耳に残り涙が出そうになりました。

前回来てから2年が経過して僕は歳をとりました、心臓の手術をしてもう二度とここにはこれないだろうと思っていたのですが、今までの活動報告をする為に校長先生を日本に呼んで、たくさんの人の前でこの学校を紹介したのです。

校長先生の話を聞いた日本人たちは皆に会えない代わりに皆を助けたいと願いお金を寄付してくれました。

そしてそのお金を皆に届ける為に今日ここにまた来れたのです。

このお金の使い道を校長先生と相談して、優秀な成績をとった子2名、学校の助けをした子2名、両親の助けをした子2名合計6名を前期後期で12名としその子供達には1人500Bの賞金を上げたいと思いますと朝礼で話をしました。

(受賞者の写真を毎期学校で撮影し送って頂きます)

そう話したときの子供達の嬉しそうなハニカム顔が印象的でした、寄付の残金は25万円タイBにすると70,000B、ここから年間にして6000Bの賞金として子供達を支援することで数年間助けることが出来ることは最善の方法と選択であったのではないかと思います。



今後も事あることに紹介して寄付を集め・・この支援が継続されるようにしたいと思いました。

小さくても継続することに意味があるという

ことがどれだけの子供達への支援へと繋がるかとまた頑張る力と勇気をもらった気がします。

そして校長先生からもう来れないかもしれないといわれたとき本当に悲しかったけれども、こうしてきててくれたことに感謝しますといわれ・・また来なければなあってそう自分を奮い立たせて子供達と別れてきました。



このオムコイの学校で始めたばかりの頃の支援活動の際には子供達は両親の手伝い優先で中学校に通わない子供達が始どでしたが、現在ではその9割は山の麓にある中学校に進学しています、義務教育を受ける子供達が増えることでこのオムコイの生活水準が上がることを願えばやはり高校に進学して欲しい、強いては大学へ進学するチャンスをつかんで欲しいと願うばかりです。

その子供達が増えるためには子供達のやる気を起こしてあげることが何より大事なことだと思います。

前期がもう直ぐ終ります、選出される為に頑張る生徒が増えってくれたら、この支援は有意義なものであると信じたいと思います。

そして、何とかこの看護士を育成するプロジェクトが始まることを祈るばかりです。

バーンクンメートゥン村からの帰り道にあるラフ族の保健所に立ち寄りました。

今回来る前に血圧計を寄付して欲しいと依頼があったからです。

オムコイの人口60%はカレン族で30%がラフ族で、残りの10%がそこで働くタイ人だそうでこのラフ族はオムコイで一番高い山の上、海拔1400mを拠点としておりカレン族とは違う風習容姿、家族形態をしています。

保健所は驚いたことに診察をする為に必要だ



ろうと思われる資材が何もありませんでした。

これで人が助かるのだろうかと逆に心配になるほどです。

オムコイの人々は町の病院に行けるほどお金がありません、町へ移動する為の交通費すらありません、そのため最初に行くのは町の診療所＝保健所です、ここで治療できることは限られたもので、国から支給されたわずかな種類の薬のみでの治療が根治することは難しいと話していました、ですがこの保健所での治療は無料です。

オムコイの人は昔ながらに薬草を取りそれで殆どの病気が良くなる様子ですが・・・

それでも心臓病や脳梗塞や脳出血や糖尿病などといわれる現代病などはどうすることも出来ず・・・村では殆どが自然死という形で助けることはないそうです。

女性の出産に関しても助産婦と呼ばれていますが資格があるわけではない昔からのおばあさんが出産を手伝いますが・・・緊急出血多量死なども当然あり・・・医療の必要性が高いことを感じます。

一番の問題点はこの保健所からオムコイの国立病院まで救急車で40分もかかるということ命の危険とその殆どが交通事故でタイ人も多々おり救急車を要請しても到着まで40分そこから搬送に40分で・・・命が持ちません・・・しかもオムコイの国立病院で全てガケアできずそこから更にホット、ジョントン、チェンマイへと回されます。

日本のように命が最優先であるべきなのに・・・対応できる医者と看護士が不足しており、そこで直ぐの手術に対応さえ出来ない場所・・・

そこで事前にお聞きしてぜひ必要な血圧計・脈拍計を日本で2台購入し寄贈しました。

子供達が成長し・・・何とか医療に関係する人となりこのオムコイの人々を救える人になって欲しいと今回は特にそう願いました。

そのためには・まず小学生から頑張る心をそして努力を惜しまず、優しい子供に成長させる、そして高度な教育を受け有資格者となりオムコイで医療関係者として戻ってこれるように応援していきたいと思いました。

チェンマイに戻り翌日バンコク銀行へ出向いてこの支援金を両替し新しい口座を開きました。

前期が終わるときから 6 名が選ばれるようにと手配を完了です。

この報告を楽しみにしてチェンマイを後に致しました。

どうぞ引き続き皆様からの支援援助をお願い申し上げます。

2018年12月11-12日（バーンクンメートウンノーイ小学校へ訪問）

NPO JT/ASH Japan 理事長 三原健三

グリーンライフサポート株式会社

代表 市毛みどり

グリーンライフサポート株式会社

社長 アッサワイン キヨサワット

参加者

チェンマイ在住

蓮田ロータリークラブ代理 黒木みづほ

チェンマイ北ロータリークラブ

川下敏樹 岩渕敦子

記 三原健三・市毛みどり

追記

滞在中12月13日にマハラジャナコン病院を（株）フレンドさん（介護用品販売）と訪問しフンサ・チエンントン看護婦長さんと面談しました。患者の人数が増えつづけ、多くの患者は貧しい人が多く訪るので診療費用が支払われず病院としても財政がくるしく、民間からの寄附に頼らざる得ない状況。我々の活動を話したところ新しい生命が生まれても赤子に提供する用品がすくなく帰国後以前寄贈して頂いた企業様にお願いしようと思います。



左から望月氏（株）フレンド、チエントン看護婦長、三原、市毛氏、キヨサワット氏（市毛氏夫）



8. 電話に出られません！

ヤスコ Wild
NPO 法人関西シャンソン協会理事長
会員 杉山 泰子

当方の固定電話の番号は、06-6336-0201です。

この番号でファックスも兼用しておりますが、お電話でご連絡をくださる場合は、申し訳ございませんが、留守電にメッセージを残してください。携帯電話の方におかけ願えませんか。

固定電話の受話器はできるだけ取らないようにしました。

理由は、詐欺の被害にあわないためです。

最近、詐欺に遭われた方々のお話を伺う機会がありました。

詐欺師たちは、グループで前もって周到な計画を立てて電話をしてきています。

電話を取ってうっかり話を聞いてしまいますと彼らの術中にはまり、瞬時に根こそぎ持つていかれます。

「おれおれ！」といつて、電話をかけてくるオレオレ詐欺には引っかかるないだろうと思いますが、最近ではそんなに単純なものではありません。

日頃取引のあるデパートや、銀行などの名前を語り電話をかけてくるそうです。

その模様を聞いてみると、どこでストップをかけたらいいのかわからなくて、おたおたしているうちに相手のペースに巻き込まれ、思考能力を失ってしまいます。

いろいろお話を聞いていますと、電話のベルの音が怖くなってしまいきました。

申し訳ありませんが、なるべく携帯にお電話いただけませんか？

どうぞよろしくお願ひいたします。 ヤスコ Wild

9. 関西支部、東京地区 行事関連チラシ

Atelier Cozy
佐藤幸子 ドールハウス展 20
2019年5月15日(水)～19日(日)
10:00～17:00 (最終日 16:00まで)
～心いやされる ひとときを～
会場 豊中市立文化芸術センター
大庭市豊中市吉田東町3-2-2
TEL: 06-6864-2991
主催 NPO 法人リタイアメント情報センター

佐藤幸子「ドールハウスの世界」展
夢のドールハウスが豊中に帰ってくる！

豊中市吉田町、自宅・神戸・西宮で数年を費し、心を織り、編み出した、古道具、古文書、古写真、古地図を用意されたドールハウス作家・佐藤幸子さんの見事な作品たちが、20年ぶりに豊中に帰って夢ぞろいです。
1/12または1/24スケールの「ヨーロッパ」は精緻極まる手作り。愛媛県の「和洋室」、奈良の「和室」、京都の「和室」など、生活感に満ちた表現と心地よい色合いで日本の古風の古き時代とヨーロッパの世界へと連れて行かれます。

「心いやされる ひととき」を楽しんでいただけますようお待ちしております。

NPO法人リタイアメント情報センター



東京地区
第6回 りういぶ落語会
お待たせしました！またまた、おもろい
話に声をあげて笑って、若返りを！！
出演者：桂 三若、三遊亭好太郎
日時：2019年(平成31年)5月28日(火)
開場 12:30～ 開演13:30
場所：お江戸日本橋亭（アクセス詳細、所在地等を参照）
※全席自由席
料金：前売り券 2,000円、当日券 2,500円
鑑賞券：前売り券 2,000円、当日券 2,500円
問合 080-9982-6237 (事務局・島村)
【銀興券販売会員】
上記の銀興券販売会員またはメール
haru_shimamura@hotmail.com
桂三若オフィシャルサイト
<http://sayoko-jiwa.net>
お江戸日本橋亭へのアクセス地図
企画
NPO 法人 リタイアメント情報センター
担当者：080-9982-6237 (事務局・島村)
メール：haru_shimamura@hotmail.com
所在地
〒102-0023
東京都千代田区日本橋茅場町3-1-6 日本橋谷町ビル
電話：03-5536-6237
最寄り駅：JR「日本橋」駅徒歩1分
地下鉄：「日本橋」駅徒歩1分
都営地下鉄：「新橋」駅徒歩1分
メトロ：「日本橋」駅徒歩1分
上方落語と江戸落語とのコラボ！！
お江戸日本橋におもろい落語旋風が吹く！！



『胆斗の人 太田垣土郎』

黒四(クロヨン)で龍になった男
北康利著・文藝春秋刊

黒四ダム建設に黄信号がともつたとのニュースは日本中に激震を走らせた。単に一企業が社運を賭けた事業というだけでなく、関西地域の復興がこの発電所の完成にかかっていたからだ。だが幸いにもこの困難な時期に、関西電力には稀有な経営者がいた。初代社長太田垣土郎である。人生の試練をいくつも乗り越えてきた彼は、不動心を身につけた全身心ぞ肝の男であった。

禹門

黒四ダム上棟60周年
「長く豊中に住まわれた太田垣土郎氏と
太田垣力氏(旧制豊中中学20期卒)を偲ぶ
講師 北康利氏

日時 2019年5月23日(木)
会場 豊中市立文化芸術センター小ホール
豊中市曾根東町3-7-2 tel 06-6864-3901
開場 13:30 開演 14:30 終了 16:00
参加費 1,000円

主催 NPO法人リタイアメント情報センター
理事長竹川忠徳 顧問 中野寛成 関西支部長 阿賀敏雄

design kenichi-ishio

黒四ダム上棟60周年『胆斗の人 太田垣土郎』
文藝春秋刊 著者 北康利氏 講演会



協力

柏原地松(5期) 新星式株投資クラブ代表 株式投資教室(株式投 資実力養成 ホテルア イボリー毎月第三土曜 日11~13時)開催	東原株式会社 東原工業株式会社 鬼解役従業員	越後常連(12期) 讀賣テレビ放送株式会社 顧問	麻植生健治(12期)
佐国泰治(5期) 豊友住生活株式会社 代表取締役	十河元生(10期) 昭和タクシージャス 株式会社 取締役チエアマ・東CAO	喜多 健(12期) 喜多クリニック院長 心療内科・精神科 ☎ 0774-33-8751	永田武全(15期) 第24代園芸社会長 関西クラシックゴルフ 俱楽部理事長
伊藤義朗(9期)	中野寛成(11期) 第62代園芸副議長 第64代園芸公委員会 委員長	竹川忠徳(12期) NPO法人リタイアメン ト情報センター 理事長	橋口誠英 東洋技研株式会社 代表取締役社長 大阪東ローテリークラブ 会長
木津谷文吾(10期) チャーチル会・京都 幹事長	伊丹淳一 株式会社伊丹ビル 代表取締役社長	野口恭弘(12期)	三井正則(21期) ダイハツ工業株式会社 販売会員

謝余金は豊中高松創立100周年事業に寄付いたします

リタイアメント作品展 会場 豊中市立市民ギャラリー(阪急豊中駅南側高架下1階)
期間 2019年6月11日(火)~16日(日) 10時~18時(16日は16時まで)



ご挨拶

躍動感あふれる木津谷文吾先輩の絵をご自宅のアトリエに眼させて置くだけでは「勿体無い」の気持ちが、今回のリタイアメント作品展開催の動機となりました。また日頃、木津谷文吾さんの行動的な生き様に惚れた方々にも加わって頂き開催致します。

お時間の許す限りお通り頂ければ幸甚です。

阿賀敏雄 拝
私の座右の銘は「忘己利他」です

リタイアメント作品展

期間 2019年6月11日(火)~16日(日)
10時~18時(16日は16時まで)
会場 豊中市立市民ギャラリー(阪急豊中駅南側高架下1階)



主催 NPO法人リタイアメント情報センター
理事長竹川忠徳 顧問 中野寛成 関西支部長 阿賀敏雄

無量宝珠
中野寛成

主催 NPO法人リタイアメント情報センター
理事長竹川忠徳 顧問 中野寛成 関西支部長 阿賀敏雄

発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター (R&I)

〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-14 芝栄太樓ビル4F VIPシステム内

●TEL 03-5733-2311 FAX 03-5733-3532

●e-Mail : info@retire.org ホームページ : <http://retire-info.org/>

(発行責任者) 事務局 島村 晴雄